

2025 年度

入 学 試 験 問 題 (3期)

国 語

2025年2月21日(金)

解答を始める前に次の注意事項を十分に読みなさい。

受 験 上 の 注 意 事 項

1. 受験票と筆記用具以外は机上に置いてはいけません。
2. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
3. 不正行為と認められた場合には退席を命じることがあります。
4. 「開始」の合図で、問題冊子・解答用紙を点検し、解答用紙の受験番号・氏名欄に受験番号・氏名をはっきり書いてください。
5. 問題に関する質問は不明瞭な文字等の確認以外は応じません。
6. 問題冊子の余白部分や白紙のページは、自由に使用してかまいません。
7. 試験終了時まで退席することはできません。試験終了の合図と同時に、監督者の指示にしたがって解答用紙を通路側に置いてください。
8. 身体の具合が悪くなったときは、手を挙げて監督者に申し出てください。
9. 携帯電話を持っている人は電源を切ってください。これを時計として使用することはできません。
10. 問題冊子は持ち帰ってかまいません。

〔I〕

次の文章Aと文章Bに関する設問に答えたのち、文章Aと文章Bを関連づけて考察する設問に答えなさい（作問の都合上、一部表記を改めた所がある）。

文章A

対比はいたるところにある

対比はいたるところにあります。とりわけ、人間が生み出した表現にはほぼ例外なく対比を見つけることができます。

小説にも論説にも、美術、音楽、映画、建築、料理にも対比があり、それなしには表現は成り立たないと言えるほどです。

小説・物語文には、主役と敵役^aと脇役などの対比が登場します。作者は、それぞれの「キャラクター設定」をして、メリハリをつけてストーリー展開をします。独白のような哲学的小説でも、「内省的なキャラ」という設定があり、社会や世間と自分の対比、かつての自分といまの自分との対比などが出てきます。舞台やドラマなら服装や身なりもキャラで分けられています。一人称になにを用いるかでもキャラ設定がされています。「オレ」「オラ」「オイラ」「わい」「わし」「あたい」「わたくし」など。

創作が乗ってくると「キャラが勝手にうごきます、しゃべりだす」などと作家さんたちがよく言います。それはまさに対比的な役・キャラが設定されているからこそです。これは現実のディベートやディスカッションでも応用できます。後で詳しく説明しますが、ロールプレイなのです。

私も小論文の指導者として役を果たすべく振る舞っています。講義中は、身振り手振りもまじえ、ユーモアもまじえ、爆笑してくれなくても心では笑ってくれているはずだと前向きに、しゃべりまくっています。

その姿は、私の親が見ても驚くでしょうし、小中高校のころの先生が見ても、「小柴くん^{しば}ってそんな人だっけ?」と首をかしげるほどのしゃべりキャラです。私の「ホントウの人格」がどうであるかなど関係なく、仕事で求められる役割を果たしている、演じているのです。バーで飲んでいるときの私、家で過ごしているときの私は、それとはまるで別の人です。

具体的な登場人物がいる小説以外にも、評論・論説にも主役と敵役があります。

① 対比でアートの見え方が変わる

一幅の絵画^{いっぶく}は、主要モチーフと背景との対比になっています。また、色彩のコントラスト（対比・対照）があるでしょう。さらに、その「一幅の絵画」は単に単独作品としてそこにあるのみならず、世間の常識と対峙^{たいじ}しているのかもしれない。美術史

上の先立つ作品をふまえて変形をこころみているのかもしれませんが。前作の自分との対峙・対比かもしれません。また、ポリシーの異なる流派へのアンチテーゼかもしれません。一つの美術作品を見ると、そうした対比で思考することで見えてくるものがたくさんあります。

② シュールレアリスム（注①）の作家たちの多くは、先行するダダイズム（注②）の参加者でした。しかし、そこから吸収できることは吸収し、蝶がサナギから脱皮するようにダダとは異なる発展をしたのです。

したがって、シュールレアリスムの特徴を理解するには、ダダとの対比において理解しなければ十分ではないでしょう。そしてそのダダも、もともと既成の芸術観を批判し、乗り越えようとする運動だったわけです。

詩人は対比的に観察する

二〇世紀初頭の「未来派」と呼ばれる絵画運動に大きな影響を及ぼしたイタリアの詩人、フィリップ・トマソ・マリネッティ（一八七六～一九四四）は、時代の先端技術のスイを集めたレーシングカーを評して「サモトラケのニケ」より美しいと書きました。

実際にセンレツな対比です。競走用自動車の機械としての造形美について数百語を費やす以上の、目の覚めるようなインパクトがこの対比にはあります。

「サモトラケのニケ」とは、一八六三年にエーゲ海のサモトラケ島で発見された古代ギリシャの大理石像です。ニケは、翼のある若い女性の姿をした勝利の女神です。現在は、ルーヴル美術館に所蔵されています。頭部と二本の腕は失われていますが、「A」の極致といった存在感をもっています。

関連で「ミロのビーナス」にもふれましょう。こちらは一八二〇年にやはりエーゲ海のミロ島（メロス島）で発見された大理石像です。現在はこちらもルーヴル美術館に所蔵されています。言うまでもなく美の女神ですが、ミロ島で発見されたこの像は、頭部はありますが二本の腕が失われています。芥川賞作家で詩人の清岡卓行（一九二二～二〇〇六）さんは『手の変幻』（美術出版社）というエッセイの中で次のように語っています。

「彼女がこんなにも魅惑的であるためには、両腕を失っていなければならなかったのだ」と。

通常なら欠けたところのない、完全無欠さを美しさの条件と見なすところを、逆説的なことに、「ない」ことによる夢のような美の実現に清岡さんは感動しているのです。

もう少し一般的な言い方をすれば、“何も足さない、何も引かない完結した美学”がある一方で、“引き算の美学”があるということでしょう。“足し算の美学”との対比でもあります。ミロのビーナスが二本の腕を欠いたかたちで発見されたことは偶然で、制作者のあずかり知らないことがらでしょう。しかし私たちはここから「ないことの美」という対比的思考を見出すことができます。

いずれにせよ、詩人の意外な言語表現もまた天啓ではなく、^d対比的な思考から生み出されているようです。

ゼロからの発想ではなく、アイディアが天から降ってくるのを待つのもなく、対比を想定すると発見できるものがあります。また何と対比するかによって、目の前にあるものの見え方が変わってきます。

あらためて、シュールレアリスム運動に参加したロートレアモン（フランスの詩人一八四六―一八七〇）の有名な言葉が思い出されます。

「解剖台の上の、ミシンとこうもり傘との出会い」です。

普通なら、解剖台にそんなものは置かないという一般常識との対比があります。加えて、ミシンとこうもり傘という意外な対比があります。

ハーバード・ビジネススクール教授として有名なクレイトン・クリステンセンは「イノベーション」を定義して「一見、関係なさそうな事柄を結びつける思考」として表現しています。一般論との対比が、経営やビジネスにおけるブレイクスルーになります。

あることをめぐって意見を求められたとき、ただちに自分の意見を出さなきゃ、とあせらず、それをめぐる一般論は何か、常識的にはどんな考えがあるか、まずそちらを設定してから、さあどんな対比をつくって自分の意見とするか模索します。

一流デザイナーの対比目線

美術の一種であるデザインにも、そのできあがった作品一つひとつに色彩的な対比や造型的対比がありますが、デザインを生み出す発想法にもやはり対比が効いています。

今世界でも注目を集めるデザイナーに、nendoを主催する佐藤オオキさんがいます。その佐藤さんが「デザイン目線」で問題解決を提唱する本が『問題解決ラボ』です。

その「デザイン目線」は、対比目線と言ってもよいくらいにいくつもの対比キーワードから構成されています。

例をあげると、「一步前へ↑半歩前へ」凝視・中心視↑ボヤツと見る・周辺視「キレ↑コク」「ポジ↑ネガ」「図↑地」「他人ごと↑他者の立場になる憑依力」「右脳↑左脳」「リニユーアル↑リデザイン」「主役↑脇役」「点と線と面」「ワガママ↑コダワリ」「どう見られているか↑どう見られたいか」「職人型↑発想型」「自由にやるとは、好きにやるではなく、正攻法をふまえた上での列解だ」などです。

佐藤さんは、自作のデザインをいくつも例示しながら、それがどんな対比的発想から導かれたのかを語っています。「B」、そうした対比的発想法がデザイン以外の領域でも有効であることを示唆しています。私もまったく同感です。

〔注1〕シュールレアリスム 20世紀初頭にフランスで生まれた芸術運動。夢や無意識の世界を表現し、現実と非現実の境界を曖昧にする特徴がある。その作品は、不条理で奇妙な状況を描き、視覚的な驚きや混乱を引き起こす。「創造の芸術」といわれる。

〔注2〕ダダイズム 1910年代半ばに起こった芸術思想・芸術運動。第一次世界大戦への抵抗やニヒリズムを根底に持つ。既成の秩序や常識に対する否定する思想を大きな特徴とする。「破壊の芸術」といわれる。

（小柴大輔著『対比思考 最もシンプルで万能な頭の使い方』ダイヤモンド社より）

〔設問〕 次の設問に答えなさい。

問1 波線部aとeで、「カタカナ」は漢字に、漢字は読みを「ひらがな」で答えなさい。

問2 傍線①一幅の絵画における対比とは何か。その説明として適切でないものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 主要モチーフと背景。

イ 世間の常識との対峙。

ウ 「引き算の美学」と「ないことの美」。

エ 前作と自分との対峙。

問3 【A】に入る適語を次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 彫塑像 イ 造形美 ウ 対比構造 エ シンメトリック

問4 【B】に入る適語を次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア なぜなら イ だから ウ 翻って エ しかも

問5 傍線②シュールレアリスムと②ダダイズムとある。この両者の違いは何か。本文中の言葉と(注1)及び(注2)の言葉を使い、八十文字以内で答えなさい。

問6 傍線③対比的な思考とあるが、筆者の言う対比するための思考の方法はどのようなものか。次のア～エの中から適切な内容の一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 一般論は何か、常識的な考えは何か、まずそれを設定し、どんな対比をつくって自分の意見とするか模索すること。
- イ 対比するものの発見。その発見したものの特性をつかむこと。
- ウ 常識的な考え方を否定すること。その否定したものから生まれるものを類推すること。
- エ 非常識的なものを肯定すること。肯定したことを根拠として推論すること。

コンピュータビジョンからロボット研究へ

私は、いくつかの研究テーマを経て、この一〇年はロボットの研究開発にのめり込んでいるが、もともと大学ではコンピュータビジョンを学んでいた。

コンピュータビジョンとは、カメラから得られた画像をコンピュータで解析し、その画像に何が写っているかをコンピュータに「C」させる研究である。

このコンピュータビジョンの研究を深めていくうちに、

「体を持たないコンピュータに真の認識が可能か？」

④という疑問が生まれてきた。

コンピュータが画像を認識できるようにするには、その映し出された画像に関する知識をプログラムとして埋め込む。

しかし、どれほどの知識を埋め込めばいいのだろうか。

たとえば、椅子を認識するには、世界中のあらゆる椅子の形をコンピュータに教え込まないといけない。一方、人間は果たしてそのようなことをしているだろうか？ 人間は自らの体を通した経験をもとに、ある程度心地よく座れるものを椅子として認識する。初めて見る椅子であっても、それを椅子と認識できるのである。

「D」人間は体を使って物を認識するために、画像に映し出される形だけにとらわれないで認識できる。座れるかどうかという認識の目的をもとに、必要な特徴に注目して、より一般的な認識が可能である。

コンピュータが人間と同等の認識能力を持つには、人間と同じように、環境の中で動き回り、物に^gつれる体が必要となる。これが、私がコンピュータビジョンの世界から、ロボットの世界に研究の^hハニをⁱ広げた理由である。

ロボットに人間らしい視覚を持たせる研究

コンピュータビジョンの研究を経て、ロボット研究に入ってまず取り組んだのは、ロボットに人間らしい視覚機能を持たせることを目的にした、視覚移動の研究だった。

私が当時取り組んだ研究は、二つに分類される。全方位視覚の研究と能動視覚の研究である。

人間は二種類の視覚動作を行っている。一つは、環境を広く見渡し、自分がどこにいるのかを認識し、また、目的の場所に移

動するために必要となる「全方位視覚」と呼ばれる視覚動作である。もう一つは、興味ある物をシヨウサイに調べるために注目し続ける「能動視覚」と呼ばれる視覚動作である。

これらの視覚動作の研究は、日常生活の場で活躍するロボットのための視覚研究だった。

それまでのロボットの視覚機能の研究は、おもに工場内や限られた環境で動作するロボットのための研究だった。私は、より複雑な環境で、より人間らしく行動するロボットを実現したくて、この人間の持つ二つの視覚動作の研究に取り組んだ。

これらの視覚動作の研究は、それなりに評価された。特に、全方位視覚の研究は当時所属していた研究室の他の研究者の研究を含めて、コンピュータビジョン研究の一分野を築いた。我々の研究から始まった全方位視覚の研究は、いまでも世界中で取り組まれ、専門の国際会議が開催されている。

しかしながら、これらの視覚動作の研究には限界があった。視覚の研究はしよせん視覚の研究であり、ロボットの機能の一部に過ぎない。

「目的を持たないロボットは物を認識できない」

のである。たとえば、椅子に座するという目的を持つてはじめて、ロボットには、目に映る物の中から椅子を見つけて、それを認識するという機能が芽生える。

全方位視覚や能動視覚の研究は、従来のコンピュータビジョンとは異なり、見渡したり、物に注目したりというロボットの動作を取り入れたものだった。この成果を取り入れたロボットの動作も、人間らしくなった。しかし、その動作は視覚情報を得るための動作であり、ロボットそれ自体が、目的を持っているわけではない。視覚動作だけでは、まだ単なる視覚の研究に過ぎないのである。

ロボットの目的とは？

では、ロボットの目的とは何だろうか。

従来のロボット研究は、おもに工場で働くロボットを研究対象にしてきた。工場では、ロボットはあらかじめ決められた経路に沿って荷物を運んだり、物を組み立てたり、ヨウセツをしたりする。工場ロボットの研究では、誘導（ナビゲーション）や操作（マニピュレーション）と呼ばれるテーマが、おもな研究対象となる。

工場内では環境は変化しない。変化したとしても「E」ものである。だから、起こりうることをすべてあらかじめ想定し

て、ロボットを設計し、そのプログラムを開発することができる。これが、工場で働くロボットの研究の大きな特徴である。
私は、工場の中で機械的に動くロボットには興味があまりなかった。私がめざしていたロボットは、より複雑で、より一般的な環境で働くロボットである。人間が生活するような場で、人間のように考え、働くロボットが作れたかった。

(石黒浩著『ロボットとは何か』講談社現代新書より)

〔設問〕 次の設問に答えなさい。

問7 波線部「く」で、「カタカナ」は漢字に、漢字は読みを「ひらがな」で答えなさい。

問8 傍線④コンピュータと人間との認識の違いは何か。その説明として適切なものを次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 人間は体を使って物を認識することができるが、ロボットはできない。

イ ロボットは目的をもって認識できるが、人間はできない。

ウ ロボットは一般的な認識ができるが、人間はできない。

エ ロボットの視覚機能は、今や人間を遥にしのいでいる。

問9 「C」に入る適語を文章中から漢字2文字で抜き出しなさい。

問10 「D」に入る適語を次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア ところが、 イ なぜか、 ウ また、 エ すなわち、

問11 「E」に入る適語を次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 不確実な イ 予測可能な ウ 微々たる エ 予測不可能な

問12

傍線⑤視覚動作の研究には限界があった。とあるが、それはなぜか。その説明として適切でないものを次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア ロボットそれ自体が目的を持っているわけではないから。

イ 視覚動作だけでは、単なる視覚の研究に過ぎないから。

ウ 視覚の研究における総合的な視点が確立されていないから。

エ 視覚の研究はロボットの機能の一部に過ぎないから。

問13

文章Aと文章Bにおける共通した論旨を書きなさい。また、その論旨について、自分の考えを書きなさい。二段落構成とすること。一段落目に共通の論旨を書き、二段落目に自分の考えを書きなさい。（この設問に関してのみ、段落始めの一文を空けを必須とする）両方合わせて百二十字以内で書きなさい。

〔Ⅱ〕

以下の文章を読んで、後の設問に答えなさい（作問の都合上、一部表記を改めた所がある）。

不思議な矢印

銀座の地下街を歩いていた。銀座線に乗って家に帰ろうと思った。この線は、山手の渋谷と下町の上野を結ぶ。電車が走っているのは暗い地下でも、沿線の駅名は、地上へあがればそのままたかな地名となる。下町から山手へ、山手から下町へ。次第に変わる空気感を、駅名はにじむように教えてくれる。

銀座駅は、路線のちょうど中ほどにある。柄の違う二つの土地の、^①銀座はまさに結び目^①といっている。文字通りそこは、人々が集い、まざりあう「座」で、華やかなイメージが全線を照らす。

丸ノ内線、日比谷線、銀座線の、三線が乗り入れていることもあって、駅自体、混乱のうずのなかが、その分、迷う人のために、親切な案内も行き届いているはずだ。

そんな場所で、わたしは迷った。入った口が悪かったのかもしれない。どこかのビルの地下が入り口になっていて、実際の乗り場にはだいたい歩かなければならないということがわかった。わたしの知る銀座駅中央のにぎやかさに比べると、あたりの歩行者も、まだ、まばらだ。

至る所に方向を示す矢印があった。銀座の地下は、矢印だらけといってもいい。混乱を招きそうな場所ほど、人間工学的にうまく作られていて、標識一つで、人をスムーズに誘導する。あまり、「A」うたがったりせずに、素直に表示に従っていけば、必ず目的地に出られるだろう。それをわたしは今までの経験から知っていた。少なくとも信じてはいた。これは自分がさんざん道に迷ったことから得た、教訓の一つだった。

素直に考えればたいいそっちへ行くだろうところを、なぜか一人、逆に行ってしまい、迷ったり、遅刻したり。そのあげく、あきれたら、「B」そんなことが幾度もあった。

頭でっかちだったと思う。自分の体を、ある自然な流れ―それは土地や道がかもしれない、人の動きが作りだす流れかもしれない―にうまく乗せることができず、余計なことを考えてしまう。そしてとんでもない方向へ行ってしまう。

道案内によく使われるものに、「道なり」という言葉がある。まっすぐでなく、微妙に曲線のある道などに使われる。「道なりに歩いて来てください」というのは、「この道にはカーブもあるけど、とりあえず道にそって歩けば着きますよ」ということだ。

その「道なり」で、道をそれて失敗したことがあり、以来、^②道に心を素直に添わせることを胸に刻んだ。刻んだはずだが、し

かし今回は迷ってしまった。言い訳のようだが、わたしだけが悪いとも思えない。

頼って歩いてきた、その案内の矢印が消えた。途中で消えたのだ。消えたそこには何もなく、わたしはただ、途上に捨てられた。えつ。ここはどこ？どっちへ行けばいいの？

とたんに足がとまってしまった。かなり歩いてから、人に教えてもらい、来た道をまた、てくてくと戻った過去の記憶が、脳裏に浮かぶ。同じことはもうしたくない。わたしは消えた矢印とともに、自分もまたこの世から消えてしまったような気がした。少し先に階段があった。階段をあがってしまったら終わりだと思った。何が終わるのか、よくはわからないが、階段をあがることには、ある勇気が必要だった。突き進む勇氣、そして間違ったときには「C」たかが地下鉄の駅まで行く話が、なにやら大げさなことになってきた。

とにかくわたしは、階段の手前まで行つては戻り、また数歩、歩いては戻った。自分ながら何をしているのかと思った。

すると、後ろから、「小池さんじゃない？」と声がかかった。かつて高校で一緒に過ごした同級生。ものすごく、久しぶりだ。数年前に同窓会をやつて、メールのやりとりが始まったが、それも最近は途絶えていた。彼女は仕事の途中だという。銀座にある弁護士事務所で長く秘書をしている。銀座は彼女の「庭」と言っている。

「どうしたの？」

「D」わたしを見ていたのではないか。

「実は迷つてしまつて。銀座線に乗りたいたのに、行き先を示す矢印が、突然消えちゃつたのよ」^④

迷つていただけ言えばよかった。なのにわたしは矢印を責め、東京メトロを心のなかで恨み、しかし声には、面白いことを見つけたという、よろこびが響いていたかも。

「消えた？」

彼女は「E」問い、次の瞬間にはそれを忘れたように明るく言つた。

「銀座線は、この階段のずっと先よ。途中まで一緒に行こう。時間があつたら、お茶するのにザンネン」^⑤

ああ、そうなのか。階段をあがればよかったのか。わたしはぎくしゃくとした自分の体を抱いて、彼女と共に階段をのぼる。するとその先に矢印が見えた。ドーナツの形をした銀座線の黄色も。

ああ、現れた！ほつとすると同時に恨めしかった。すっかり矢印に心乱されたわたし。あまり頼るのも考えものだが、初めて

のルート、確実に目的地に近づいていることを、わたしは逐次、確信したかった。

そういう感覚を支えてもらうためには、一定の間隔で出てくる矢印が必要で、わたしが「消えた!」と不安を覚えたのも、おそらくその間隔が多少なりとも開いたのだろう。そう、間隔が開いたにすぎない。

「ありがとう、また会いたいね」

⑥
いつも決めない別れの言葉。もう永遠に会わないかもしれない。

わたしは彼女と別れ、改札を入ったが、矢印が消えたあたりに、もうひとりの自分を置いてきたような気がして、心のなかですうすうとした。その「わたし」は、彼女と出会わず、階段もあがらず、矢印が消滅した一点の穴に吸い込まれ、向こうに開けた世界で生きる。まったく別の新しい町。ま新しい人生。

あるとき、助けてくれた杉本さんは、高校のとき、葛飾のお花茶屋に住んでいた。当時、地図をもらい、何人かで遊びに行く約束をした。その日、わたしは無事、杉本さんの家へ行き着いたが、杉本さんはいなかった。

お花茶屋は遠いところだ。いるはずの人がいなかったこともあり、わたしは、地の果てへ流れ着いたような気がした。仕方なく家へ戻ったが、あとで電話がかかってきた。

「約束した日は明日だよ。明日も来るのが大変だったら、もう来なくてもいいよ」

わたしは明日、何も用事がなかったけれど、一気に気力が落ち、行く気が失せた。もう来なくていい、の言葉にすがり、次の日、本当に、行かなかった。

葛飾区には、今でも高校生の頃の自分がいるだろう。杉本さんには会えぬまま、お花茶屋のあたりを、ふらふら歩いているだろう。

(小池昌代^{まさよ}著『影を歩く』方丈社より)

〔設問〕 次の設問に答えなさい。

問1 空欄【A】に入る適切な語を次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 受け入れたり イ 面白がったり ウ あらがったり エ 素直に従ったり

問2 空欄【B】に入る適切な語を次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 悲しがられたり。 イ 面白がられたり。 ウ からかわれたり。 エ うとんじられたり。

問3 空欄「C」に入る適切な語を次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 無視する勇氣。 イ 引き返してくる勇氣。 ウ 居直る勇氣。 エ 常識に従う勇氣。

問4 空欄「D」に入る適切な語を次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア うろうろしている イ 躊躇ちゆうちよしている ウ 喜々としている エ 茫洋ぼうようとしている

問5 空欄「E」に入る適切な語を次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 真剣に イ 面白そうに ウ いぶかしく エ 親しそうに

問6 傍線①銀座はまさに結び目とあるが、どんな意味で結び目なのかその説明として適切なものを次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 山手線の環状の中間点に当たる。

イ 山手の渋谷と下町の上野を結ぶ中間にある。

ウ 丸ノ内線、日比谷線、銀座線の、三線が乗り入れている。

エ 駅自体、混乱のうずのなから、その渦が結び目に当たる。

問7 傍線②道に心を素直に添わせることを胸に刻んだ。とあるが、どんな経験がそうさせたのか。適切でないものを次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 頭でっかちで、自分の体を、ある自然な流れにうまく乗せることができず、余計なことを考えてしまった経験。

イ 素直に考えればそっちに行くだろうところを自分一人逆に行き、迷ったり遅刻したりした経験。

ウ この道にはカーブもあるが、道にそって歩けば着きますよ、というその「道なり」で道をそれて失敗したことがある経験。

エ 親切な案内が行き届いている地下鉄の駅で、素直に標識に従ってスムーズに移動できた経験。

問8 傍線③自分もまたこの世から消えてしまったような気がした。とあるが、そのような気がしたのはなぜか。その説明として適切なものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 以前から、自分の存在に虚無感を抱いており、そうした日常が、道に迷うという現実を引き起こしたと感じられたから。
イ 助けてくれた杉本さんは、高校のとき、葛飾のお花茶屋に住んでいた。その思い出が二度と戻らないと感じたから。
ウ 案内の矢印が途中で消えた。そこには何もなく、消えた矢印とともにわたしは、途上に捨てられたと感じたから。
エ 階段をあがってしまったら終わりだと思った。だが、その先には無意識の希望も感じることができていたから。

問9 傍線④行き先を示す矢印が、突然消えちゃったのよ」とあるが、その説明として適切なものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア わたしは矢印が見えなくなったことを責め、東京メトロを心のなかで恨んでいた気持ちを示している。
イ 他人を責めることしかない自分に気づいているが、それを直せないことにいら立っている気持ちを示している。
ウ 突然矢印が消えてしまったことに驚き、何か得体のしれない世界に引き込まれてしまったという気持ちを示している。
エ 矢印が消えてしまったことの不思議さに興味を覚え、神秘的な世界があると感じ始めていた気持ちを示している。

問10 傍線⑤ぎくしゃくとした自分の体を抱いて、とあるが、「ぎくしゃくとした自分の体」と感じたものは何か。その説明として適切なものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 体調が悪く、しっかり歩けない状態を示している。
イ 昨日の疲れが取れない。疲れを引きずっている憂鬱な状態を示している。
ウ 心が虚ろで何にも集中できない。鬱々として今の状況に不満を感じている。
エ 現在の自分の状態に「違和感」を感じている。今現在の空間に居心地の悪さを感じている。

問11 傍線⑥もう永遠に会わないかもしれない。とあるが、主人公はなぜそのように感じたのか。その理由を本文中の言葉を用いて八十文字以内で答えなさい。

$$(\text{II})$$

問
11

問
10

問
7

問
4

問
1

問
13[illegible]

--	--	--	--

問
8

問
5

問
2

--	--	--

問
9

問
6

問
3

--	--	--

[illegible]

a	か た き や く
b	粹
c	鮮 烈
d	て ん け い
e	拳

5
×
2
||
1
0
点

問二
ウ
問三
イ
問四
エ

3
×
3
= 9
点

問五	
	既成の秩序や常識を否定する思想を持つダ

5

れ ば 内 容 が あ っ て い
よ い 。

問 六

ア

3
点

問七	f	かいせき
	g	触
	h	範囲
	i	詳細
	j	溶接

5
×
2
= 10
点

問八	ア
問九	認識
問十	エ
問十一	イ
問十二	ウ

5
×
3
= 15
点

問十三	
共通の論旨は「対比する」とは創造の原点	

合計 10 点

ナ	字	5
ス	下段	点
2	げ落	+
点	ない	5
。	いじ	点
	とめ	
	マイ	1
		0

$$\begin{array}{c} \text{—} \\ \parallel \\ \text{—} \end{array}$$

問一	ウ
問二	エ
問三	イ
問四	ア
問五	ウ

5
×
3
=
1
5
点

問六	イ	問七	エ	問八	ウ	問九	ア	問十	エ
----	---	----	---	----	---	----	---	----	---

5
×
3
= 15
点

問十一

「ありがとう、また会いたいね。」

いっつとも

8点

8

[illegible]

「ありがとう、また会いたいね」いつも決めない別れの言葉。

右太字の内容が書いていれ
ば8点。文末は「から」「の
で」等で終わる。そうなつて
いない場合はマイナス2点。